551. 506. 9

冬の上高地の気象*

（第4回山の気象シンポジウム No. 6）

大　井　正　一**

まえがき

1956年12月28日より57年1月4日までアルムクラブは冬山合宿として北穂東稜及び奥穂の登攀を行なったので其の時の気象を報告したい．此の冬は暖冬異変で冬型の気圧配置は発達しなかった．然し前の冬は既に報告したように寒冬で北アは連日吹雪にとじ込められ鈴木君等の遭難があった．又今回は今年の夏前穂L状ルンゼで墜死した北村君の追悼登山である．アルムクラブではこうした遭難ブームに批判があったので，此の合宿の参加者は芳野満彦，岩堀，本山，私のたった4人と云う淋しさであった．芳野氏は既に徳沢園に越冬していたので新宿駅での見送りは吾々3人に対して30人と云う出征でもするような騒ぎで，われわれも決心的のような悲壮感を味わわされた．

12月29日　7h 島々では小雪がちらついていたが 9h 30m バスで沢渡に着いた時は快晴になっていた．トラックに便乗して山吹トンネルの向うで下車，漸く重荷に悩む難行軍に移る．百軒長屋のスノーセットから先は百米毎位に雪崩のデブリを越えて行く．清水谷トンネルには長さ十数米，太さ数十糎のツララが下っていた．これから先は新らしいデブリの連続である．若しやって来たら逃げ場がない．ジェット機のような轟音を立てて雪崩は道路を越えて梓川に流れ下る音も間近に聞えて来た．13h 半中ノ湯に着き泊る．ここは建設省の区内観測所で雪尺は 80cm，自記最低は今朝の −16°C であった．移動高前面のため気温低く快晴であった．

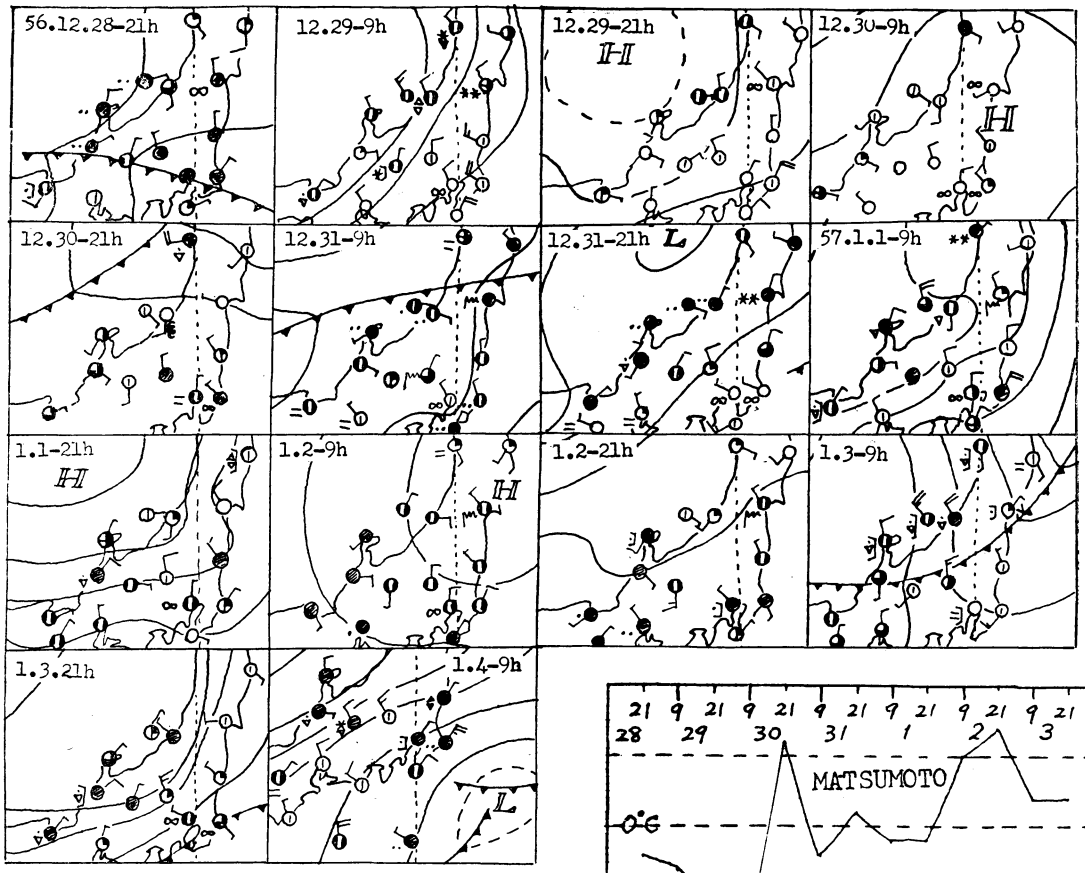
12月30日　底の抜けた様な深い青空．−7°C，ここから先は 2m 位の積雪でラッセルされていない．釜トンネル内は氷にステップを切って天井から抜け出る．出たところは物凄いラビーネンツークとなって居り，見張りを立てて走り乍ら通過する．天然海峡では昨年坂巻温泉の主人が雪崩で死んでいる．上高地に入ればカラマツは霧氷をつけ，大正池は凍り，山々は新雪に輝き，正に神苑の感じである．大正池取入口，売店では夫々百葉箱を具え自記している．売店の最低は −19°C になっていた．12h 上高地ホテルに着き昼食．今獲れたばかりの兎が二匹置いてある．満彦氏に迎えられて出発．河童橋のところは路が完全に氷板となり，五千尺旅館は粗氷に蔽われて居り，岳川谷を吹き下る風が強く吹いていた．厚生省小屋でも気象観測をやっていた．ここでシールをつけ，六百沢の林中に北村君荼毘のケルンを訪問，明神館より梓川の雪に埋まった河原に下り，徳沢を目ざし一直線に進む，移動高は去りつつあり，寒冷前線が南下中で Ci，Cs 全天を蔽い，明神，前穂の稜線に大雪煙が上がり始め夕焼空にバラ色の噴煙の様に見える．河原は大雪原と化し，時々高い地ふぶきのため方角が判らなくなる．寒さのため手足がしびれて来る．18h 日暮れる頃徳沢園着．小屋番が未だ来ないので私が代行することになったのは誠に残念であった．宿帳に最後に記入した2名は奥又に登り27日頃に雪崩に埋まってしまった事が判った．此の辺一帯の梓河原は日本離れのした素晴らしい大自然を味わえる地帯であるから，ダム化に対して日本山岳会が反対声明を出しているのも至当と思われる．

12月31日　今日も亦快晴，−7°C，前穂がモルゲンロートに輝く．8h 出発，梓河原に出て猶も大雪原を遡る．兎の足跡が所々に見られ，ドロヤナギが赤く紅葉している．新村橋は下の雪原が高いため，下を潜るのに苦心する．穂高の稜線の上に Cc が速く動いて湧くように出て来る．これはいつも寒冷前線の接近時に見られる現象である．又大天井岳方面から真黒な Sc が押し寄せて来るのが見られる．奥又出合で吹雪となり，私だけ一人別れて帰ることにする．14h 頃小屋に戻ると私の知人である慶応OBの4人が来ていた．16h 頃雪の降る中を4人の若い人がやって来た．この4人は徒歩渓流会員で19才から17才までで，葛温泉から十日がかりでワカンで鳥帽子槍縦走をしたもので，その勇敢さには驚かずには居られない．此の中の2君は前にアルムクラブに居たこともあり，後に槍で吹雪のため死亡している．この他に戸畑山岳会，広島大学，山岳巡礼クラブ，どんぐり山の会，鵬

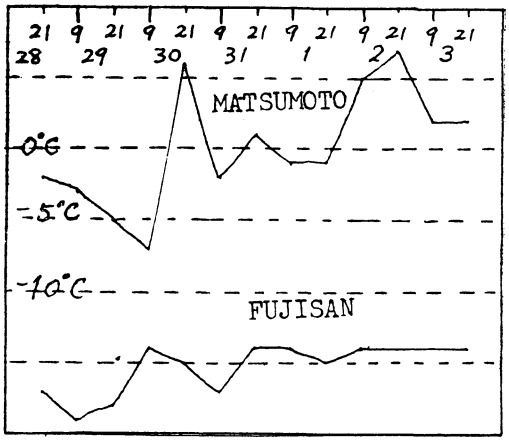
* Weather in Winter at Kamikochi (Japan Alps)

** Shōichi Ohi　気象庁高層課

—1962年11月22日受理—



第 1 図



第 2 図

翌山岳会，山村民俗の会の方々も来泊された．18h 頃突風と共に霰が降り，快晴となった．寒冷前線通過が此のようになって現れることは上高地が気候的には表日本的であると云ってよいと思う．

1月1日 穂高のモルゲンロートに全くの快晴を迎える．山々は真白に輝き，地面の雪の反射と共に目も眩む様な明るさで風も無く，夏の様に暑く日に焼ける一日であった．私は屏風岩をスキーで往復した．日没時には波状の Cc が全天を蔽い燃ゆるが如き夕焼であった．高気圧圏内のための快晴であるが上層風が強く稜線は雪煙をあげて居た．三君は此の日徳沢小屋より北穂東稜の登はんに成功したが強風のため全員手に凍傷を負った．夜は小説「氷壁」の主人公上岡氏と二人きりになった．

1月2日 3時起床して上岡氏を送り出す，−13°C．此の頃は Cs だったが，夜が明けてからは終日 As の曇りで太陽がぼんやり見え，風も無く静かな一日であった．穂高は稜線まで終日見えていた．私はスキーで大滝三に登ろうとしたが森林帯の深雪で夕方までに引返した．此の日二君はザイテングラードを経て奥穂に登頂した．夜に入って雪が降り出す．本山君のみ戻って来た．横浜山岳会の3君，白樺山岳会，自衛隊の人々が泊った．此の日は移動高後面になって居るが，著るしい低気圧は遥か南方洋上にあり，21時の天気図でも大阪，名古屋のみが雨となって居り，弱い気圧の谷の場合の天気の特徴を示しているようだ．

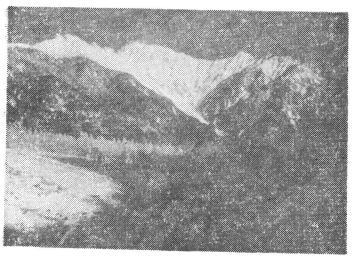
1月3日 今日も亦快晴で山は雪煙をあげているが，徳沢園付近は昨夜の雪で全くの大雪原となり，そこに木

① 1月2日　移動高前面で快晴．左から明神，P5，P4，P3，P2，P1 下又白谷，三本槍，前穂，P1，P2，P3，奥又本谷，P4，P5，P6屏風の頭

② 12月30日　坂巻温泉付近で眼前に落下した雪崩．此の辺の雪崩は小さく固いブロック状をして居り，旧雪雪崩に似ている．

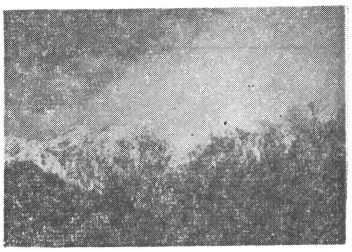
③ 12月30日　清水谷トンネルを飾る氷柱．

④ 12月31日　天然海峡付近此の辺は雪崩に対して逃げ場がない．前年ここで死んだ人がいる．



⑤ 12月31日　上高地の入口木々は霧氷をつけ大正池は凍つている．

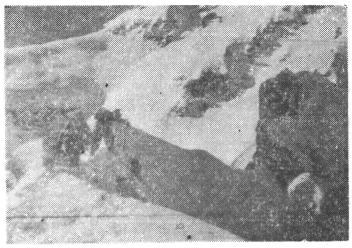
⑥ 12月31日　寒冷前線近づき巻積雲出はじめ前穂高に雪煙があがる．



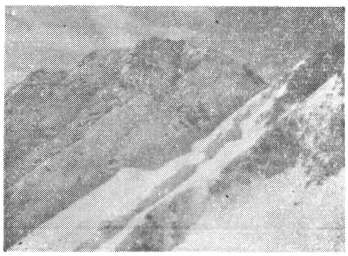
⑦ 1月1日　寒冷前線間近前穂高方面より巻積雲がやつて来る．

大井正一写真（＊印は芳野満彦氏写真）

⑧* 1月2日　明神東稜の末端左方涸沢カールの中に涸沢小屋が二階だけ出ている.

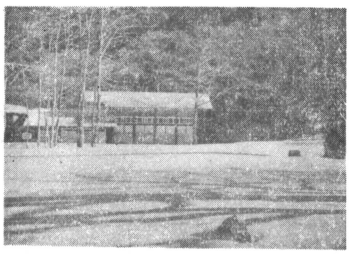


⑨* 1月3日
北穂高東稜ザッテル



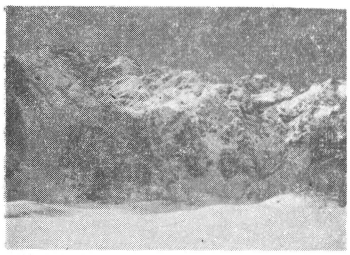
⑩* 1月3日
ザイテングラートと奥穂高

⑪　1月3日
日本の南岸低気圧による巻雲

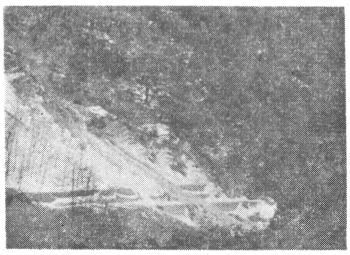


⑫　1月4日　徳沢園付近の雪原　此の辺の雪は気温が低いので雪量そのものは少ないがとけないでいつまでも粉雪の状態を保つている.

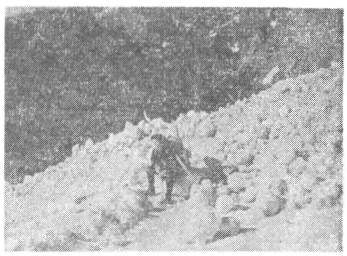
⑬　1月4日　弱い寒冷前線が通過中で高積雲が西穂高の低い稜線を越えているが穂高の上は越えない.



⑭　1月4日　奥又松高ルンゼ付近，周囲のルンゼを落下した雪崩がいたるところに小山のように積つている.左手の松高ルンゼは特に雪崩が頻発し事故も最も多い.



⑮　1月5日　中ノ湯付近のバス道路をこえる雪崩，旧雪雪崩に近い．このようなものは十数回見られた.



⑯　1月5日　冬ではあるが梓川の雪崩はこのようにブロック状で固く旧雪雪崩に近い.

大井正一写真（* 印は茅野満彦氏写真）

々が樹氷をつけて長い影を引いている有様は神苑の趣がある．徳沢の森も神秘的な美しさを見せていた．私は独りでスキーで奥又に入って見た．谷の中は両岸より落下するデブリが山の様に積って居り，特にデブリが沢の底をえぐって対岸にのし上げた部分は滑り台の様に氷板になって凄惨な感じを与える．此の下には先日遭難した神戸の両君が眠っているのだ．10h 頃から西穂の方向，即ち南に大きな高積雲が東進しはじめ，稜線がらは波状の Cc が速く東進する．13 時松高ルンゼ取付点に達し，岩と氷の殿堂の素晴らしい眺めに時の経つのも忘れる．寒冷前線通過と云っても穂高では此の程度の変化しか起らない．寒さで手足は全くしびれてしまい，いくら揉んでも直らない．夕方南方の Cc に著るしい幻日と彩雲が見られた．夕方山巡の高橋照氏等のパーティー到着，吾々の2人が帰着した．気象庁山岳部の長田君が単独でやって来た．同君は此の翌々年の秋八ケ岳で死亡された．前回と同じく此の程度の寒冷前線の通過では上高地ではほとんど晴れたままであることがわかる．

1月4日 今日も奥又が真紅に燃えて夜が明ける．私は岩堀君と帰還に向い，大雪原をスキーで飛ばした．気温が低いので粉雪の軽さは内地では見られないものであった．穂高神社を過ぎると急に氷板になって滑りにくくなって来る．大正池付近から穂高は雲に蔽われ雪足が垂れ下っている．これは南岸低のためだから上高地はやはり表日本的気候だと云える．ホテルで上岡氏にあう．上岡氏は一昨冬2名で下又白で雪崩にあい，10日後に救出されている．梓川に入ると空は晴れて居た．18h 坂巻温泉に着いた．翌5日も快晴に恵まれ，デブリの山を越えて沢渡に戻った．

むすび

1. 此の冬は暖冬であったため意外に天気が良かった．従って以下の記述には更に此の点をつけ加えて考えて頂きたい．

2. 常識に反して上高地周辺の山は表日本的気候に属している．

3. 移動高或いはシベリヤ高気圧の高圧部に蔽われた場合は常に天気はよい．但し稜線では風が強く凍傷事故が多い．

4. 寒冷前線通過の場合は西から Ac が急速に走りきたり，やがて黒い Sc がやってきて吹雪となる．然し5～6時間でやむ．此の点は裏日本と大分違っている．

5. 低い寒冷前線は西穂方面のみを越えて，穂高方面は越えられない．又天気はほとんど悪くならず風が強くなり気温が下るだけである．

6. 南岸低気圧の影響は裏日本より強く受けて悪天候となり易い．（これは今回はなかったが，今迄起った大部分の事故は台湾坊主による新雪雪崩や吹雪である）

7. 雪は梓川では深く旧雪雪崩が多い．穂高神社以南では雪は極めて少なく氷板となって居り，西風が強い．穂高神社より奥は粉雪が積っているが，気温が低いので溶けないだけで量は少い．従って新雪雪崩を起し易い．涸沢も北ア北部に比べれば少いが新雪雪崩は極めて多い．

参考文献

1) 上高地のお正月，大井正一，渓流，**14**, **25**, **26**, **27** (1957).
2) 冬山合宿報告，岩堀道男，アルム通信，**29** (1957).

〔新書紹介〕

長期予報とその利用法，長期予報研究会編，B6版，170頁，恒星社発行，1962年7月，400円．

気候の年輪，気候研究グループ編，A6版，85頁，気象協会発行，1962年7月，250円．

両者とも，最近気候の変化や天候の異常を前もって知って計画を立てるのに用いようという一般の要望や，最近気候は曲り角に来ているが，その詳細をという技術者の要望に答えるために，気象庁長期予報管理官室の技術者が中心になって作っている長期予報研究会，気候研究グループの人々によって，前者は主として啓蒙の，又後者は多少共専門的な立場から書かれたものである．

前者は学生，長期予報を利用する人々に判りやすくしようと述べられているように一般の人への理解を主として書かれている．そのために全体7項目のうち5項目，約100頁は日本における気候を，冬，春，梅雨，台風一過秋になるの順序で動気候学的な立場から説明してあり，これだけよめば日本の一年の気候の大要を知ることができるようにしてある．その上で気候の年々の異常をどうして知るかの長期予法の方法，そしてその利用の方法，分野等が説明してある．

後者は日本の気候についての知識は一応持っている人々に対して日本の気候がここ数十年間にどのように変化して来たかを，降水量の変動と渇水，昔の梅雨，今の梅雨，暖冬ともおわかれか，わすれられた凶作，変りつつある風水害の諸項にわけて述べ，最後にこれからの気候はどうなるかという形で総まとめとしてある．その一項に今後冬の気温は下る傾向にあるとあるが，今年の冬の寒冬と思い合わせて興味深いものがある．

両者とも比較的筆者による不統一も少く編集されているが，慾を言えば現在の学問研究の段階では困難ではあろうが，気候や天候の変動についても少し詳細な説明がほしかった．

（長尾　隆）